

国内研修成果報告書

研修テーマ

「暮らし観光から考える大衆に向けない観光の在り方とは
～なぜ大衆に向けない観光が人を呼ぶのか～」

【研修概要】

- 研修場所：佐賀県嬉野市 旅館大村屋
- 研修期間：2026年1月29日～1月31日
- 研修参加人数：4名

1. 研修動機

本研修は、参加するメンバーが同じゼミであるが、ゼミの研究とは関係を持っておらず、昨年度の真鶴町への国内研修がきっかけとなっている。真鶴町では、移住について学ぶとともに暮らし観光への知見を深めた。その後、秋学期のローカルイノベーション論で嬉野温泉・大村屋の代表である北川氏がゲスト講師をしてくださり、大衆向けではない観光についてさらに学ぶことができた。今回は、前回の真鶴町での研修を踏まえ、より「暮らし観光」にフォーカスをあてたフィールドワークを行いたいと考えた。また、「暮らし観光」を地域に入って自分たちの肌で感じることで、学びを得たいと考えた。

2. 研修スケジュール

【1日目】

まちあるき兼旅館代表北川さんへインタビュー

【2日目】

ティーツーリズムである「茶輪」へ参加
旅館従業員へヒアリング

【3日目】

地域住民の方々へヒアリング

3. 研修内容

○1日目

旅館大村屋へ到着後、すぐに北川さんとまちあるきへ出向いた。「まちあるき」とは嬉野市観光協会会長でもある北川さんや旅館の従業員の方々がまちを案内し、嬉野に住む人々の「暮らし」を観光するものである。飛行機到着に遅れが生じたこともあり、まちあるきをする中で、北川さんへインタビューする形となった。

まずはシーボルトの湯へ出向いた。はるか昔から嬉野は温泉地であることから、温泉が

まちには多数あるが、ここは公衆浴場であり、住民のみに関わらず誰でも入浴できる。ここで印象的だったのは、「出前」制度である。チケット販売機の選択欄に「出前」というボタンがあり、提携している地域のご飯屋さんから施設内へテイクアウトできるという。公衆浴場としては珍しい仕組みである。この制度ができたきっかけは、元々嬉野は旅館や飲食店が多く、お店から離れられない人が多かったため、出前の需要があったからだ。地元の利用者が多いため、地元の定番ご飯メニューが並んでいた。浴場と飲食店という一見分野が違うサービス業が協力し合っているのも、嬉野の人の繋がりが深い所以を感じた。また、施設内にあるフリースペースではヨガ教室や体操教室など開かれており、「公民館」のような位置づけであると北川さんが言及していた。公民館はないのか、と北川さんに尋ねたところ「公民館よりも公衆浴場を利用する人の方が多いから、ここがコミュニティスペースにもなっている」と話していた。コミュニティスペースを無理やり作るのではなく、住民が自然発生的に集う場所をコミュニティの起点とするという発想が学びになった。

次に木原商店を訪れた。直々に仕入れる旬の野菜やくだものが並ぶ商店では、手作りのお惣菜やお弁当も販売している。お昼には住民の方々が買いに来て、忙しくなるという。商店の方も明るく話しやすく、地域にひとつでも通いたくなる商店があることが暮らしには必要不可欠だと思った。

その後、「Asahiya」という服屋を訪れた。店主の娘さんが「お茶っティー」というキャラクターを生み出し、グッズを販売している。「靴下屋」とコラボをしており、嬉野だけでなく全国にもファンをつくっている。そもそも嬉野の小学生は「チャレンジショップ」という活動に取り組んでおり、経営の仕組みを非常に現実的な方法で学ぶというカリキュラムが組まれている。まち全体で子どもの教育に携わり、地域で人を育てるという具現化を目の当たりにしたようだった。「Asahiya」を出た後も、地元の飲食店や歴史を交えた話を聞きながらまちを歩いた。

まちあるきを通して、北川さんが「法政大学の学生さんです」と出会う住民の方々に紹介して下さるたびに、「毎年来てくれてるね」と笑顔で言ってもらえることが多かった。初めて行く地域の人に出会うと少し緊張するものだが、嬉野ではあまり緊張を感じなかった。それも、よそから来た人をすんなり受け入れるという嬉野の寛容的な心を持っている方が多いからだと感じた。さらに、「暮らし観光」を実際に体験してみて、訪れた場所の紹介だけでなく、住民との対話や歴史という、地域に根付いたストーリーに触れることで住む人の暮らしが見えてくるのだと感じた。その暮らしを人伝えではなく、自分でまちを歩き、住民と会話をし、五感で感じることによって、嬉野のファンが生まれるのだと感じた。

そして夜には、まちあるきで出会った「Tea Salon TSUBAKI」を経営する宮下さんとの対話の中で、暮らし観光や自分の人生までも考える深い時間を過ごした。宮下さんは以前

医療関係の仕事に就いていたが、難病の治療中にお茶に救われた経験から、嬉野の茶農家へ修行をしながら店舗を開業している。食器や食材、お茶、細やかな空間づくりにこだわる宮下さんの姿勢は、「自分の好きなもの、大切にしたいもの」と仕事をするのが人生の楽しさへと繋がると教えてもらえたような気持ちになった。それは宮下さんの「ハンディキャップを抱えていても、人の役に立ちたい」という想いを根底に持ちながら、おもてなしをする姿から伝わってきたものでもある。また、対話を重ねるなかで印象的だったのは「自分の大切だと思うものを大切に、それが届けられる人に届けたい」という言葉である。この言葉にこもった思いが暮らし観光の考え方と繋がったように感じた。暮らし観光も「大衆に向けた観光」ではなく、「届く人に届ける観光」と考える。嬉野はマストツーリズムのように「誰でも、とにかく数を多く」という観光ではなく、「本当に嬉野の良さを感じてもらえる人」を求めているのだ。そして、自分のこだわりを軸に持ち、訪れた人に合わせようとはしない。元々の地域の風土と合う人が集うという感覚が暮らし観光の要素として必要だと考えた。

○2日目

2日目は「茶輪」というティーツーリズムを体験した。数ある嬉野茶の中からひとつ茶葉を選び、サイクリングしながらお茶を飲む。そして、まちの風景を見ながら、自身でまちのなかに入りこむという体験型プログラムである。この茶輪を通じて、嬉野にはお茶畑が広がる日本の原風景が存在しており、人・風景・香り・光がすべて自然に巡り合ったものだと感じた。これは自らまちのなかを自転車で漕ぎ、入り込まないと分からなかったことだ。ティーツーリズムは自然とつくられたまちをそのまま感じてもらうという、嬉野に合った観光の在り方である。そしてその伝え方も無理やりではなく、一人一人が感じたまちや暮らしで良い。その伝え方の自由さと地域の寛容さが合わさるからこそ、ティーツーリズムが体験した人びとの心に刺さるのだと思う。

また、旅館の従業員である山口さんへヒアリングした。山口さんは佐賀県出身だが、まちあるきを体験したことがきっかけで嬉野に移住、そして旅館大村屋に就職した。ヒアリングの中で「以前は嬉野は人がいなくて寂しいイメージだったけど、まちあるきをしてみたら地元の人でも楽しそうに暮らしているし、人の温かさに触れて、住みたいと思った。」と言っていた。まちあるきには「移住したい」と思わせるほどの力があるが、「移住をさせよう」という強引な気持ちから生まれてはいない。嬉野に惹かれるのは、まちあるきを体験した人が自然と感じるものである。そんな力が生まれるのも暮らしを大切にするといい嬉野の人の奥ゆかしさがあるからだろう。

○3日目

3日目は、地域の様々な方々へヒアリングを行った。嬉野は山口さんのようにまちあるきを体験して移住する人も少なくない。実際、全国を旅した夫婦が嬉野のファンになり、移住後カフェ兼ゲストハウスを開いている。また、Uターン者も多く、「地元に戻りたい」という気持ちを起こさせるのも嬉野の魅力である。

和多屋別荘という旅館では、昔は団体客室だったスペースをオフィスとして企業に貸している。すでに多くの企業で埋まっており、「温泉入浴し放題」という特典がより惹きつけられるのであろう。旅館には他にもピエールエルメのスイーツ販売や、図書館兼本屋、お茶屋、お香の販売といった多様なサービスが存在している。このように、地元ではない人でも居やすいという居場所づくりの工夫がみられた。多様な人の出入りがある地域だからこそ、私たちのような学生も受け入れてもらえる雰囲気だったのだと気付かされた。

今回の研修を通じて、嬉野の暮らし観光は「人と人をつなぐ」観光の在り方だと感じた。まちあるきを通して、人が人を繋ぎ、知り合いとなる。そこで生まれた安心感がやがて移住やリピーターのきっかけになる。そんな繋がりや和が広がることで、暮らし観光はまちに溶け込む。そして嬉野に住む人の、地元を大切にしたいという思いが合わさって生まれたものだと考える。前回、真鶴町へ国内研修として訪れた際に「移住者が」暮らし観光に取り組む、地域の人にも派生していることを学んだ。嬉野は対照的で、元々「老舗旅館の代表が」暮らし観光に取り組んでいるため、住民への信頼は土台として存在している。そのうえで住民も暮らし観光に参加するという環境づくりが成されている。こうした住民が参加したいと思える暮らし観光だからこそ、人間の心に響く観光の在り方だと感じた。真鶴も嬉野も同じ暮らし観光とはいえ、その中身が違うことに意味があると思う。どちらも地域の風土に合った観光の在り方であるからこそ、地域に良い空気が循環しているのだ。

そして嬉野に引き寄せられる人たちは、自分の叶えたい夢や妥協できないこだわりを持っていて、それが暮らし観光という大衆に向けない観光の在り方とマッチするのだと考える。そんな「自分の大切にしたいもの」を持った人だからこそ、まちが大切にしているヒト・モノ・コトを大切にできるのだと思う。

今回の研修で、私たちも暮らし観光や嬉野というまち、文化や人に魅了され、引き続き関わり続けたいと思った。このような気持ちになるのも地域に深く入れる国内研修だからこそだ。得た学びや人との繋がりをこれからも持続できるように、大学での学びや地域づくりの実践へとつなげていきたい。